

聖霊降臨後第22主日(特定26) マタイ23章1―12節

〔直訳〕

- 1 そのとき イエスは 語った 群衆に そして 彼の弟子たちに
- 2 言いつつ、
「モーセの座の上に 座った 律法学者たちは そして ファリサイ派の人々は、
3 それですべてを 何であれ 彼らが言う あなたがたに
おこないなさい、そして 守りなさい、
だが彼らの業に従って おこなうな。」
- なぜなら彼らは言う、そして 彼らはおこなわない。
4 だが彼らは縛る 重い「そして 担い切れない」荷を
そして 彼らはのせる 人々の肩の上に、
だが彼ら自身は 彼らの指で 望まない 動かすことを それらを。
5 だがすべての 彼らの業を 彼らはおこなう
見られることのために 人々に。
なぜなら彼らは広げる 彼らの 経札を、そして 彼らは大きくする 衣服の房を、
6 だが彼らは愛する 第一の座を 正餐において
そして 第一の席を 会堂において
7 そして 挨拶を 広場において
そして 呼ばれることを 人々によって、『ラビ』と。
8 だがあなたがたは 呼ばれてはならない、『ラビ』と。
なぜなら一人がある、あなたがたの 先生で、
だがすべて あなたがたは 兄弟である。
9 そして 父と 呼んではならない、あなたがたの 地の上で、
なぜなら一人がある、あなたがたの天の父で。
10 だが呼ばれてはならない 指導者と、
というのは、あなたがたの指導者である一人、キリストが。
11 だがあなたがたの最も大きい者は あるだろう、あなたがたに 仕える者で。
12 だが者は誰でも 高めるだろう、自身を 低くされるだろう
そして 者は誰でも 低くするだろう、自身を 高められるだろう。」

〔新共同訳〕

- 1 それから、イエスは群衆と弟子たちにお話しになった。2 「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。3 だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りな

さい。しかし、彼らの行いは、見做ってはならない。言うだけで、実行しないからである。4 彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。5 そのすることは、すべて人に見せるためである。聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。6 宴会では上座、会堂では上席に座ることを好み、7 また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む。8 だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ。9 また、地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父おひとりだけだ。10 『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。11 あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。12 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。

① 彼らの業に従っておこなうな（1―3節 a）

① a 「イエスは群衆と彼の弟子たちに語った」

並行箇所マルコ12章38節には「イエスは教えの中でこう言われた」とあるだけで、イエスが誰に教えたのかは述べられていない。しかし、前の段落の終わり（37節 b）に「大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた」とあるので、イエスの教えの聞き手は「群衆」であったと言える。しかし、マタイはここに「弟子」を加えている。「山上の説教」でも、イエスの教えを聞いていたのは「群衆と弟子」である（五1）。このように、23章と「山上の説教」の聞き手が同じにされたことに注目すべきだと思われる。マタイがこのような場面設定を行ったのは、23章の講話が「山上の説教」の裏返しとなっており、23章を理解するためには、「山上の説教」を思い起こす必要があるからかもしれない。13節以下には、「あなたたちは不幸だ」が繰り返されるが、「山上の説教」は、「心の貧しい人々は、幸いである」で始まり、「幸い」という祝福が繰り返されてきたのと対照的である。23章は、律法学者とファリサイ派への非難と叱責であるが、聞き手である群衆と弟子は、それを聞かないでよいというのではない。彼らも同じ危険に陥ることがあるのだから、聞いて、「山上の説教」という前向きで、肯定的な指示を思い起こさなければならぬ。

① b 「モーセの座の上に座った」

「モーセの座」は会堂（シナゴグ）に作られた、飾りの付いた石製の椅子。聖書の巻物を納めた契約の箱に隣接した壇上に、会衆席と向かい合って置かれていた。ファリサイ派は70年のエルサレム陥落後も生きた延びた唯一のユダヤ教宗派であり、70年以降、この「モーセの座」に着いた人たちである。律法学者はこの座から教えを述べたが、イエスも「山上の説教」を語るとき、座るといふ姿勢を取っている。5章1節に「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た」とあるが、「腰を下ろされると」と訳されている語は、2節の「座った」と同じ動詞。

② 「律法学者」

バビロン捕囚後のユダヤ教では、律法学者は古代王政国家の「書記」や「法務官」にあたる職務を果たしていた（エズ・ギニ15―16、トビ122）。その先例はエズラであり、彼はバビロンにおいて「モーセの律法に詳しい書記官」であった（エズ76）。律法学者の任務は律法研究、青少年

年の教育、律法に基づいた裁定である。優れた律法学者は学生たちの教師として活動し（使二二 3 参照）、最高法院の判事の座にも着いていた（マタ二 4、使四 5）。

④ 「ファリサイ派」

イエス時代のユダヤ教には、ファリサイ派、サドカイ派、エッセネ派があった。ファリサイ派は福音書にもたびたび登場し、イエスと律法の解釈をめぐる論争している。彼らは、荒れ野でモーセを通して与えられた律法を、時代を経た社会の中でも実践するために律法の解釈を重視していた。ファリサイ派は古くからの律法解釈を口伝の律法として重視し、書かれた律法と同等に扱った。サドカイ派は口伝の律法を尊重せず、モーセ五書の権威を重んじた。祭司貴族階級を中心とするサドカイ派は現状維持といった保守的な姿勢が強く、書かれた掟と現実生活との間のズレの存在を認めなかった。エッセネ派は福音書には登場しないが、世俗化した神殿祭司を批判し、信仰生活を守るために荒れ野での生活を選んだ。洗礼者ヨハネも荒れ野で活動したが、日々繰り返し行う沐浴ではなく、一回限りの洗礼を説いたことがエッセネ派とは異なる。

⑤ 「それで、何であれ彼らがあなたがたに言うすべてをおこなない、守りなさい、だが彼らの業に従っておこなうな」

16章5節以下では、ファリサイ派とサドカイ派の教えを警戒するようにと命じられていたが、ここでは、その警告は律法学者とファリサイ派の「行い」に集中している。彼らの教えを「すべっておこない、守りなさい」とあるように、イエスは「モーセの座」に座り、律法を解き明かす者の存在を否定してはいない。しかし、律法学者とファリサイ派の現実には、「彼らの業に従っておこなうな」と命じられるように、厳しく批判される。「モーセの座」は指導者層の権威を象徴するものであるが、今この座に着いているファリサイ派たちの権威は偽りであることを明らかにし、真の権威の在り方をイエスは教える。

② 人々に見られるためにおこなう（3b—7節）

① 「重く担い切れない荷を彼らは縛る」

荷物を括り、縛りあげるというイメージを使って、ファリサイ主義が掟のまわりにめぐらした、多種多様の諸規定が表現されている。ファリサイ派は、書かれた律法と共に、言い伝えられた律法を守ることを教えていた。「言い伝え」に意味があるかどうかは、それを守ることを主張する人々の姿勢にかかっている。ファリサイ派はすでに、イエスから「自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている」と厳しく批判されている（マタ一 5 6）。

② 「彼ら自身は彼らの指でそれらを動かすことを望まない」

律法学者は知識を駆使して、人間が行うべき振る舞いを細かく説明する。しかし、彼らの教えはあまりに細かく、数も多すぎて、人々には「背負いきれない重荷」同然である。しかも、彼らは「彼らの指で」それを動かさうとはしない。新共同訳は「自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない」と訳すが、原文には「貸す」にあたる語はない。ここでは、他人を手助けしない彼らの怠慢が批判されているのではなく、自ら実行しようとしぬい不忠実さが批判されている。彼らは実行することを「望まない」から、人々の苦しみが理解できない。彼らの興味は学識であって、人々の救いにはない。

③ 「人々に見られることのために」

外面だけを飾る、見せかけの信仰心は、「山上の説教」でも批判されている（六1・5・16）。
④「経札」（聖句の入った小箱）

小箱には、出エジプト13章1―10節、11―16節、申命記6章4―9節、11章13―21節などが書きつけられた小さな羊皮紙の札が納められている。日ごとの祈りに際して、この小箱は、皮紐で左腕上膊部内側と前頭部に結び付けられた。それは、「この言葉を腕に付けてしるしとし、額に付けて覚えとしなさい」（出13・16。申六8、一一18参照）という規定を文字通りに受け取った結果であり、主の言葉と戒めを思い起こす手立てとするためであった。

⑤「衣服の房」

長方形の上衣の四隅に淡いブルーか白色の房を付けることは、民数記15章37節以下と申命記22章12節が命じている習慣。マタイ9章20節と14章36節によれば、イエスもこの習慣に従っていたと見られる。

⑥「第一の座を：第一の席を」

後のラビの間では、年齢によって序列が決められていたが、この頃は、外的な名声によって決められていたのだろう。人々は公の場での、名声と評価とをめぐって争っていた。

⑧「ラビ」

文字通りには、「私の偉大な方」の意味。一世紀末頃に、パレスチナの律法教師の尊称として使われるようになり、元来の意味を失うことになった。

③呼ばれてはならない（8―11節）

①「だがあなたがたは」

名声を追って、神への道からそれてしまった律法学者やファリサイ派を反面教師として（2―7節）、キリスト者は共同体の中でどのように振る舞うべきかが教えられる。ユダヤ教の会堂とユダヤ人キリスト者の間には、しばしば論争もあったが、にもかかわらず前者が後者に大きな影響を与えていたことは過小評価されるべきではない。マタイの教会には、律法学者に相当するような、教師の役目を果たしていた者がいた（二三34、一三52）。彼らに向けてマタイは「はいねいに教える」。

②「父と呼んではならない あなたがたの」

「あなたがたの」の解釈には次のような可能性がある。

①あなたがたはあなたがたを父と呼ぶな。

②あなたがたはあなたがたのだれをも父と呼ぶな。

③あなたがたはだれをも父と呼ぶな。

④と⑤は非常に似ている。意味は、『ラビ』という呼びかけも、『父』という呼びかけも、共同体の中で傑出したメンバーに使うべきではないということである。だが、⑥の意味であれば、家族の内の父親が指されていることになるだろう。神の国の使信の地平に立てば、精神的には家族から解放され、神へと完全に向かうことになる。兄弟姉妹としてキリストと一つになるとき、共同体は父の保護のもとにある。共同体は父による「世帯」であり、父に身を任せている。

⑦「指導者」

この語（カセーゲータース）は哲学の世界からの言葉であり、哲学者アリストテレスがこの語で呼ばれている。おそらく、高度なことを要求する教師を指す言葉だろう。

④ 「仕える者」

キリスト者の共同体では、奉仕が基本原理とされる（マタ二〇26参照）。偉大な人とは奉仕し、仕える人のことである。

④ 自身を低くする（12節）

① 「自身を高める者は誰でも低くされるだろう」

「高める」という語は、文字通りには「持ち上げる・高く上げる」を意味し、転義して、栄誉、評判、身分、力などを「高める・大きくする」の意味で用いられる。食事の招待客が上席を選ぶ様子に気づいたときや（ルカ一四11）、自分が正しいと思い他人を見下している人々に「ファリサイ派と徴税人」のたとえを語ったときにも（ルカ一八14）、イエスは同様の言葉を語っている。

これらの用例には、人間を真に「高くする」のは人間自身ではなく神であるという信仰が示されている（エゼ二一31参照）。マリアは、主は貧しい者を「高く上げる」と言って、神を賛美する（ルカ一52）。エジプトの地にいたイスラエルの民を「強大なものとした」のも、神である（使一三17）。ヤコブの手紙は、兄弟どうしの争いが起こった教会に「主の前にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高めてくださる」と書く（ヤコ四10）。ペトロの手紙も、「神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすればかの時に神はあなたがたを高めてくださる」と述べ、神に信頼する生き方を呼びかける（1ペト五6）。

② 「自身を低くする者は誰でも高められるだろう」

キリスト者が務めを果たすときに、踏まえるべき根本原則が語られる（マタ一八4参照）。

⑤ 全体の構成

① 全体を通してみると、七つの命令が述べられている。これらの命令に注目して構成を考えてみると、段落分けがはっきりとしてくる。

② 3節では「おこないなさい」「守りなさい」という肯定の命令があり、その後に「おこなうな」と否定の命令が続く。肯定から否定への命令をつなぐのは、3節三行目の「だが」である。

③ 8―11節には、「呼ばれてはならない」「呼んではならない」「呼ばれてはならない」という否定の命令が述べられ、最後に「あるだろう」という命令を意味することのできる未来形が置かれている。ここでは否定から肯定へと向かうが、これを結ぶのは、やはり「だが」（11節冒頭）である。3節と11節の「だが」は複数の命令を一つのまとまりにする役目を果たしている。

④ 3節の命令と8―11節の命令の間に、「なぜなら」（3節四行目）で始まる理由文が置かれている。そこでは、弟子と群衆が做ってはならない律法学者とファリサイ派の行いが述べられる。

⑤ 8節以下は「あなたがた」への注意へと向かっている。8節冒頭の「だが」は、主題の変化を表しているから、7節と8節の間に大きな区切りを置くことができる。

④ 12節冒頭にも「だが」が置かれている。そこでは「誰でも」と述べられるように、「あなたがた」への勧告が一般化され、まどめの言葉となっている。

これらの点から段落分けすると、1―3節三行目が第一段落、3節四行目―7節が第二段落、8―11節が第三段落、12節が第四段落となる。

⑤ 3節三行目の「おこなうな」と四行目の「おこなわない」によって、第一段落と第二段落がつながり合っている。同様に、7節二行目「ラビと呼ばれる」と8節一行目の「ラビと呼ばれてはならない」によって第二段落と第三段落がつながれ、第三段落と第四段落は、11節の「仕える者」が「自身を低くする」と言い換えられて、結び合わされている。

⑥ 真の権威を示した方

① 律法学者とファリサイ派の人々は権威を象徴する「モーセの座」に座って教えるが、偽善によってその権威を汚している。マタイはこの場面の聴衆を「群衆と弟子」であったとする（1節）。それによって「群衆と弟子」が聞いていた「山上の説教」を思い起こさせる。また、「モーセの座に座って」権威を汚す偽善者に対して、真の権威を明らかにするイエスを対置させている。なぜなら、イエスも「山上の説教」を語るとき、「座っていた」からである。

② 律法学者とファリサイ派の人々は「言って、おこなわない」人々である。「彼ら自身は彼らの指でそれらを動かすことを望まない」（4節）という描写は、彼らの有言不実行を表している。しかし、彼らが「おこなう」ときがある。それは「人々に見られる」ことを望むときである（5節）。彼らは経札を「広げ」、衣服の房を「大きく」して、信心深さを誇示し、人々から「ラビ」と呼ばれることを好む。13節以下で、イエスは彼らを「偽善者」と呼ぶが、それは、彼らの思いが神ではなく、人々の目に向けられているからである。彼らは権威を与えられているが、その権威が神から与えられたことを忘れ、その権威を利用して自分を高く見せようとし、偽善者となっている。彼らの関心事は「人々に見られること」である。だから、「第一」の位置を、「ラビ」と呼ばれることを彼らは愛する。

③ 権威の出所を忘れた彼らの目は、当然、神には向かわず、人々に向かう。ただし、人々の苦しみではなく、人々からの喝采や尊敬に目を向ける。彼らは人々の肩には掙という重荷をのせるのに、自分では担っておこなおうとする人ではないから、その重みと、そこから生じる苦しみに思いが向かわず、人々の苦しみに無関心になる。

④ 「あなたがた」は、このような偽善者を反面教師として、どのように振舞うべきかを学ばなければならぬ。8・9・10節の理由文に「一人」が繰り返される。「先生」「父」「指導者」と呼ばれるのはただ「一人」であることを知るなら、あなたがたはその方の前で、すべて「兄弟」となる。律法学者やファリサイ派の人々が見失ったのは、ただ「一人」の方の権威である。イエスは律法学者やファリサイ派の人々を厳しく批判するが、それは権威を与えられた者の取るべき振舞いを教えるためであり、弟子への呼びかけとなっている。

⑤ 「自身を高める者」は「人々に見られる」ことを望む律法学者たちであり、「自身を低くする者」は、自分を低くして、仕えたイエスである。この「一人」に倣うとき、真に弟子となる。権威は否定されるべきものではないが、誰によって与えられたかを忘れるとき、「自身を高める者」となり、偽善者となっていく。真の権威を示した方は、自分を低くして、仕えた方である。